
脇役は簡単に殺される

へげぞ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役は簡単に殺される

【Nコード】

N5657X

【作者名】

へげぞ

【あらすじ】

学級でいちばんの脇役である主人公は、主役といえる同級生たちの連絡役になる。異世界、宇宙戦争、魔法対決の連絡の情報中継係になった主人公・脇田進は、学級の主役たちをどう動かすかの戦略を練り、主役たちの相談役になる。主人公はあくまでも脇役だけど、主人公はただ勝つ負けるだけを考えている主役たちに疑問をもち、もっと勝者にも敗者にも優しい結末はないかと考え悩む。学級内政ファンタジー。

1 (前書き)

猫田蘭さんの「脇役の分際」を高校生編まで読んで、インスパイアされた作品です。

なんで、一人だけ。

おれは高校三年生の登校日初日に思った。

なんで、こんなクラス分けにしたんだよ。絶対に恨んでやるぞ、教師のやつら。

ああ、どんよりする。これは何だ。誰の謀略だ。校長の罠か、担任の教育方針か？ おれは三年生の新しい学級で一人浮いていた。

三十一人の学級。男十六人、女十五人。どうしても、席を並べると、男が一人だけ余るのである。

おれの名前は、脇田進。名簿順が「わ」であるから、学級で一番最後の席に座っている。おれ以外の三十人は、男女で隣り合わせになっっているのに、おれ一人が隣に誰もいない。

教師の罠だ。

おれだけ仲間外れにして、いじめようっていうんだ。そうに決まっている。そうにちがいない。

クラスで二人組をつくれ、といわれて、初日に、おれ一人だけが余った。他の奴らはみんな男女のペアだ。

ひどい。差別だ。なんちゅう、運の悪さだ。

世の中には、主役と脇役がいるものだが、おれはまちががなく、脇役。クラスのおれ以外のやつらはみんな輝いている。休み時間もみんな、楽しそうにがやがややっている。そんな中で、おれ一人がとり残されてしまった。いわゆる、ぼっちというやつだ。学級でおれ一人だけが友だちがいない。

この恨み、晴らさずに置くべきか。クラスのやつらに復讐してくれる。おれをクラスで一人だけのけ者にした恨みを思い知らせてやる。

高校三年生の一学期の登校初日、担任の先生がいった。

「いいか、よく聞け。世の中には身分相応ということばがある。自

分の身の程を知らず、高望みをした者は必ず罰を受ける。おまえらはゴミ虫だ。これから一年でおれ様が腐った根性を叩きなおしてやるから気を引き締めておけ。奴隷として生きるコツを学べ」

教室がざわめいた。この教師、正気じゃない！
でも、脇役のおれはじつと黙っていた。

勇敢で行動力のある熱い男子の一人が立ち上がった。

「先生、何をいつているんですか。ぼくたちは、奴隷なんかじゃありません。平等な人類です」

元気な女子が加勢した。

「そうです。わたしたちにも基本的人権があります」
担任はいった。

「くくくくつ。おまえらが平等だというのか。本当に心の底からそういえるのか。安部！ おまえは自分と脇田が平等だとも思っているのか」

おい！ 先生、おかしいだろ。なんで、おれが出てくるんだよ。しかも、安部くん、そこでいいとどまらないですよ。おれと安部くんは平等だっていつてよ。

「先生、脇田くんは立派な雑草だと思います」

安部くん、その言い方はトゲがあるなあ。

先生はさらに怒声をあげた。

「この中に自分が脇田と平等だと思っているものはいるか！」

なんだ、その質問は。

みんな、黙った。

おい、みんな。寂しいことは考えないでおくれよ。

「そうだ。脇田はおまえらとはちがう。脇役なんだ。ここにいないくてもいいんだよ！」

先生が怒鳴る。

みんな、おれの方に顔を向けようとしな。ちよつと、ひどいじゃない？

「先生、おれは世界が幸せになるんなら、恋人もお金も栄光もいら

ないよ。醜い脇役でいいよ」

おれがいった。

「先生、おれ、ちょっと用事があるんで早退します」

安部くんがそういつて教室を出て行った。

「おれも」

「わたしも」

おれ以外の全員が教室を出て行った。

教室に、おれと先生だけが残った。

静かになった。

先生が語る。

「いいか、物語の最初に死ぬ脇役、それがおまえだ、脇田」

先生はナイフをとり出して襲ってきた。

だが、おれは子供の頃から身に着けていた対術で、先生の腕をとり、ナイフを先生の体に刺さるように仕向けた。

「ぎゃあおお」

先生はただの人間ではなかった。怪物だった。正体を現した怪物をおれは奪ったナイフで刺し殺した。

脇役に簡単に殺される。

それがうちの担任だ。

高校三年生が始まる。

2 (前書き)

いちおう、毎日午前五時更新を目指します。
できなかった時はごめんなさい。

担任が死んだ。怪物と化した先生の死体は、警察がおとなしく引き取っていった。おれは罪を問われなかった。

担任のいなくなった学級には、若い女の副担任が来ることになった。副担任などというものがいたことをおれたちは知らなかった。ただし、副担任の準備が間に合わないらしく、学級に顔を出せるまではまだしばらく日にちがかかるらしい。副担任が来るまでは、学級委員による自治に任せられることとなった。

おれは脇役だから、担任を殺したことを誰も問い詰めなかった。

おれが友だちもできずにすごしていた高校三年生の二日目は、学級委員の主役ともいえる頑張りによって、無事終わった。迷惑をかけてすまない。まだ高校生なのに、担任に代わって学級をまとめあげる学級委員は、おれには主役のように輝いてみえた。

で、本当の物語の始まりは、二日目の放課後だった。

学校から帰ろうとしたおれは、宿題のノートを教室に置いたままにしていたことを思い出し、教室へと帰って行った。時間は午後六時だっただろうか。

教室に近づくと、少し、不思議な気配がした。何か、教室が静かすぎる気がするのだ。みんなの帰ったはずの教室にやってきたおれは、廊下から教室の中を見て、あつと驚いた。

教室の中に、光の精霊が降臨している。教室の中心が光輝き、教室の中を黄色く染めていた。

教室の中には、物語の主役である四人の男女がいた。安部、安藤、つぐみ、つぼみ、の四人だ。安部、安藤は男子で、つぐみ、つぼみは女子だ。光の精霊は、四人の高校生に話しかけていた。おれは、四人の勇者が異世界へ召喚される場面に、偶然、立ち会ってしまったらしい。おれは廊下からその様子を見ていた。

光の精霊はいった。

「わたしたちの世界は滅びかかっています。わたしたちの世界を救う四人の勇者が現れると、お告げがありました。あなたたち四人は運命に選ばれし予言された勇者です。どうか、わたしたちの世界へやってきて、世界を滅ぼそうとする混沌の悪魔たちを倒してください。わたしたちの世界を救えるのは、あなたたち四人しかいません。どうか、お願いです。力を貸してください」

四人は、狐につままれたような顔をしていた。あまりにも唐突なできごとで、要求を受け入れるというのが無理だ。普通なら、光の精霊の願いを聞いてやるやつはいない。だが、四人の勇者はちがった。

「ぼくたちのできることなら、力になりましょう」

四人には力強い意思があった。

おれは脇役なので廊下で見ただけだが、四人の勇者は、光の精霊に導かれて、異世界に移動した。不思議な空間の歪みを通って行った。

四人の姿が消えた頃、脇役のおれが邪魔になることはないだろうと、教室に入ったら、

「今、見たことは誰にもいわないでください」

と光の精霊にいわれた。そして、空間の歪みと、光の精霊は、すうっと消えてしまった。

おれは、脇役なので、家に帰って、爆睡した。

おれには関係ないことだ。

おれは勇者ではないのだ。

驚くべきことは、翌日の朝にあった。教室に登校してきた安部が、全身血だらけだったことである。包帯をぐるぐる巻きにしていたが、なお、血が止まらないらしく、白いはずの包帯が濃い赤色の血に染まっていた。

安藤、つぐみ、つぼみも、無傷ではなかったが、安部を心配して

いるようだった。

「大丈夫か、安部」

クラス中の者に心配された安部は、

「家で料理を失敗した」

とかいう下手な嘘をついていた。明らかに、異世界で怪物と戦ってきたに決まっていた。

おれは、高校三年生の三日目の放課後、安部に話しかけた。

「実は昨日、光の精霊を見たんだ」

四人の勇者は驚いていた。

「黙っていてくれ。おれたちは、逃げるわけにはいかない」

安部がいった。

「見守ることしかできないけど、何か手伝えることがあったらいいよ」

おれがいうと、安部はいった。

「大丈夫。おれたちは、おれたちに行けることをするだけだ。脇田は、相談にのってくれるだけでいい」

わかった、と返事した。

おれの個人的判断による学級一の美少女であるつぐみは、

「わたしたちに何か少しでもできることがあるなら力になりたい。それがわたしたちに身分不相応な役目だとしても」

といった。おれは、

「女の子に戦いはきつくはないか？」

と聞いたが、

「わたしは黒魔法が使えるの」

と答えた。つぐみは、

「祈るだけでもいい。あの世界のために頑張れるなら」

といていた。おれが話していると、空間の歪みが現れた。

「行くっ」

つぐみがいった。四人は迷うことなくでかけていった。

「安部も行くのか。そんな体で」

おれが叫んだが、安部は、うなずいただけだった。

四人は今日も異世界を救う冒険に出かけたようだ。

おれは、家に帰って、だらだらとゲームをしているうちに、四人の勇者のことを忘れ、あっけらかんと熟睡した。

次の日になると、安部の傷は治っており、

「回復魔法を覚えた」

とのことだった。それから一週間、ずっと四人は放課後、異世界に出かけている。おれは普通の日常を送っている。選ばれた四人の勇者じゃないから。

相変わらず、教室では、ぼっちだ。安部たち四人が時々、話しかけてくれる。異世界の話を聞けるので楽しい。なんでも、四天王のうちの一人を倒したそうだ。

安部たち四人の勇者は、異世界を救うために日夜、命をかけた戦いをしている。なんでも、聞いている話によると、死んでも生き返る道具を手に入れて、異世界で購入しているらしいのだが、四人の安全が心配だ。

学級の他のやつらは気楽でいいなあ。あいつらは、四人の勇者とは関係ない平凡な暮らしをしているんだろうなあ、と思っていた。

まあ、おれの考えていることは、これで学級一の美少女つぐみちゃんは、安部か安藤のどちらかが彼氏になるだろうということだ。それで、つぐみちゃんを犯す安部と安藤のことを考えて、日夜、もんもんとしていたのだが、異世界に行っている四人がどんな生活をしているのかわからないので、妄想にすぎない。

ところが、おれの想像と現実がちがっていた。

一時限目の放課のことだ。安部たち四人の勇者を、クラスの六人の男女が囲んだ。緊迫した場面だった。六人の内訳は、男三人、女三人である。あくまでも、カプルのできそうな人数配置がしてあるのが憎い。クラスで一人だけのけものにされたおれへの当てつけであろう。許しがたし。

「どうしたんだ、魔宮？」

と聞く安部に、魔宮が答えた。

「おまえたちはやりすぎたんだよ。あの世界の崩壊は定められた運命だ。無駄にあがらうのはやめるんだな」

四人の勇者に、さっと緊張が走った。

「それを知っているとは、何者だ」

安部の詰問に、魔宮が余裕をもって答える。

「おれたち六人は、あの世界の魔族だ。予言の勇者を探して、この世界に侵入していた。おまえたちが暴れすぎたんで、気づいたんだ

よ

「魔族だと。まさか、同級生と殺し合うことになるとはな」

「おっと、ここでやってもいいが、クラスの他の奴らがまきぞえになるぞ。特に脇田は、死ぬだろう」

安部は、冷静に威圧した。

「教室では、休戦だ。おまえたちもこの世界で暮らせなくなれば困るだろう」

魔宮は余裕の表情だった。

傍観しているおれは、啞然とした表情である。クラスの三十一人のうち、十人が特殊な人間だった。これは、ちよつとまともな高校生生活ではないだろう。

魔宮はかなり自分の力に自信があるようだった。

「運命に選ばれし予言の勇者？ そんなのはたわごとだ。おまえらは、惨めに殺される宿命なんだよ。人が魔族に勝てると思っっているのか？」

「どうやって、この世界に来た？」

「闇の精霊の力で」

「この学校でどうするつもりだ」

安部の発言に、魔宮はおれの背中の服をつかんで持ち上げるといふことで、意思を示した。

「それは、おまえたちが地べたに這いつくばり、敗北を認めるまで、こつこつ雑魚を殺していく。世の中の九割は生きている価値のないゴミ人間にすぎない」

ええ、おれって、急にまた殺されそうになってるの？

四人の勇者、助けてえ。

おれは戦いません。脇役ですから。

「四人の勇者よ、おまえたちにもわかるだろう。選ばれし特権というものが。おれたち魔族は、生まれた時から選ばれし特権をもっている。脇田のような何の価値もない虫けらとはちがう」

やばい。このままじゃ、殺されちゃう。なんとか、しなくちゃ。

「あの、魔族のみなさん。魔族のみなさんも、この世界で殺人を犯せば、警察に追われますよね。この世界の警察や軍隊も、けっこう強いと思うんですが」

「バカじゃねえのか。おれたち、魔族が人類の警察や軍隊を恐れるとでも思っているのか。おれたちがどんな極悪人なのか、まったくわかってないようだな。一つの世界を滅ぼそうとしている魔族だぞ」
おれはしょんべんちびるかと思った。

「なぜ、あなたたちは悪に走るのですか？ 世界の滅亡など、悪いことに決まってるじゃないですか」

おれの必死の弁明に、魔宮は答えた。

「それは、悪こそ正義だからだ」

おれはぎよっとした。

「そうだろう。秩序を守ることのどこが正義だ？ 誠心誠意尽くすことのどこが正義だ？ 正々堂々戦うことのどこが正義だ？ そんなものは、実戦を知らぬど素人のつくった妄言だよ。正義とは、隠れて上手に悪さをするズル賢さにあるのさ。世界の秩序を守ろうとする光の精霊のエネルギーを寄生して奪っていくのが、おれたち魔族のやり方だ。四人の勇者は負ける運命なんだよ」

「しかし、世界の秩序は、それを構成する人口の大部分が真面目に働いているから成り立っているのですよ。チョイ悪が恰好つけても、真面目な労働者の日々の労働なくしては、成り立たないものですよ」
「真面目に働くなど、クソくだらねえ。政治家が正義か？ 官僚が正義か？ 軍隊が正義か？ 悪なんだよ、この世界を支配しているやつらもみんな」

「おれはそうは思いません。あなたは、反抗する者に正義があるといっているのだと思つてよろしいですか？」

魔宮は少し、怪訝な顔をした。だが、はっきりと答えた。

「そうだ。反抗するおれたち魔族こそが正義だ。権威をぶらさげて威張り腐ってるやつらのが腐っているだろ」

おれはかなり堅い文化論を展開することにした。

「パンクを知っていますか？ 音楽のジャンルに代表される文化ですが？」

「おお、パンクは好きだぜ。アドレナリンが分泌するよなあ」

「そのパンクとは、抵抗文化なのです。正統を維持する主流派があつて、初めてそれに反抗をするパンクという文化が維持できるので。パンクが正統になったら、パンクは、罵声を浴びせる対象がいなくて、自壊するのですよ。正統を倒し、新たな新代表に君臨したパンクは、もうすでにパンクではなくなっているのです。抵抗する対象のなくなつたパンクは、強い者への反抗だつたはずが、弱い者を虐める権力者になってしまうのですよ。パンクは正統となれば、それまで自分たちがバカにしていた権力者と同じになってしまうですよ」

「話がむずいぜよ。簡単にいえ」

「パンクは、抵抗文化であるからパンクなのであり、パンクはパンク自身だけでは世界を統治できないんですよ。成功者となつたパンクは、新しく生まれてくる若いパンクに罵声を浴びせられるのですよ。パンクはパンクを生み出して空しい循環しつづけるのです。悪とは、つまり、寄生しているにすぎないんですよ」

おれは投げ飛ばされた。魔力で、通常より遠くへ飛び、教室の壁にぶち当たつた。

「おまえのいう悪は、どうにも、気に食わねえ。だが、思い当たる節がないでもないの、今日のところは見逃してやる」

魔宮は、自分の席に帰つた。六人の魔族は、日常に戻つた。

四人の勇者は、壁に叩きつけられたおれを助けてくれた。

3 (後書き)

序盤から話が堅くなりすぎたなあ。がんばって読んでね。

さて、脇役のおれは、普通に学校生活をすごしていた。

六人の魔族は、異世界に行って四人の勇者と戦っているらしいが、決着がつくのはだいぶ先になるそうだ。異世界では、王国が壊滅したり、復活したり、大忙しらしい。おれは脇役なので、それを聞いて、一喜一憂した感想を述べていただけなだけだ。まあ、おれは当事者ではないので気楽である。

そんなわけで、脇役生活をのんびり楽しんでいた五月の頃。

おれは、おれと同じような脇役である、いちろう、ひさし、さとの男子三人と、里中、矢内の女子二人の合わせて五人仲間を観察していた。この五人は変なのだ。

この五人は、授業中に、五人同時に携帯電話の着信が鳴るという奇怪なできごとを起こし、一躍、学級の話題をさらった。

それも、五人全員の着信が同時に鳴るとするのは、一度や二度ではなかった。

ぶつぶつぶつぶつ、と五人の携帯の着信が交響楽を奏でる。授業中にだ。すると、五人は、

「緊急の用事なので」

といって、五人とも、教室から出て行ってしまふのである。

五月の間に、五人の授業からの逃げ出しは、十回を超え、職員室でも問題になったらしい。

担当になるらしき副担はまだ来ない。学級委員がずっとホームルームを仕切っている。

それで、五人の抜け出し先を尾行してみるということを、脇役であるおれは、脇役らしからぬ行動力を発揮して行ったのである。

五人を尾行してみても、まかれることが何度もあった。

だが、おれは五人の尾行をやめることなくつづけた。執念であっ

た。根性であった。努力であった。おれの努力が職員室で話題になり、おれが授業を抜け出す六人目に数えられ始めた。

「脇田。おまえ、五人組と一緒にになって、授業を抜け出しているらしいな。素行不良で、ご両親に連絡して、面接するからな」

と教頭にいわれた。この世界のどこかで、何か面白いことが起きているのだとしても、脇田であるおれにはまったく手に届かないことで、社会の秩序にがんじがらめになってしまう。

しかし、おれは、日曜祝日を利用して、五人の尾行を怠らなかつた。やはり、世の中、根性は必要である。その努力が報われる日が来た。

五月も終わる頃、ついに、五人の集合する現場に出くわしたのだ。そこでは、宇宙怪人バンクーバーが街を破壊しようと暴れていた。なんと、授業抜け出しの五人は、宇宙怪人と戦うヒーロー戦隊だったのだ！

いちろー：レッド

ひろし：イエロー

さとし：ブルー

里中：ホワイト

矢内：ピンク

だった。五人そろって、シユヤクナンジャイ！と名のついていた。なんとということだ。おれと同じような学級の脇田だと思っていた五人も、地球を宇宙人の侵略から守る正義の味方だったのである。五人の携帯電話が同時に鳴るのは、地球防衛軍からの出動の命令だったのである。

悔しい。

なんで、おまえら、脇田じゃないんだよ。

シユヤクナンジャイなんて、ヒーロー戦隊は、まずめったにやられない正義の味方じゃないか。

どうせ、いつも勝ちつづけて、常勝凱旋なんだろう。
やっつけられるかよ。

なんで、おれだけ脇役なんだよ。

シユヤクナンジャイは、必殺技を決めて、子供たちに大人気らしい。全国からファンレターが来るらしい。

電車代やバス代もタダらしい。公共機関は無料で使えるらしい。

しかも、秘密の変身兵器を装着しているのだ！ なんと羨ましい。

おれは、五人の戦いを近くで見っていたが、どかん、どかんと爆発しているの、これは近づいたら死ぬな、と思った。

家に帰って、不貞寝した。

六月の初めの頃、山田がおれに話しかけてきた。

山田は、シユヤクナンジヤイの五人組と敵対している学級内勢力で、あまり目立たないが地味に派手なことをしているやつだ。学校帰りに、何か奇抜なことをしているらしい。

だから、おれは山田が近づいてきた時、脇役のおれに脇役らしい役割がまわってきただけだろうと思った。だが、それはちよつとちがつたようだ。

脇役のおれにしては、重要な接触だった。

山田はおれの名前を読んでから、こういったのだ。

「脇田くん、実は、おれは宇宙人と地球人のハーフなんだ」

おれはずつこけた。

本気だろうか。どこか病質的妄念にとりつかれているのだろうか。脇役であるおれたちには、映画や漫画で見るような世界はまずやって来ない。ただ、平凡な日常をすごして終わりだ。

おれはその立場を受け入れているし、でしゃばるつもりはない。

この学級の十人が関わっている異世界の戦争にも、二カ月間、おれは関与していない。なぜなら、おれは脇役だからだ。

そのおれに、宇宙人の血を引いているなどという劇的な告白をする山田は、何を考えているのだろうか。

「お父さんと、お母さんの、どっちが宇宙人なの？」

とりあえず、おれは聞いてみた。話をつづけなければならぬ。

「お母さんが宇宙人なんだ。お父さんは地球人だよ。それで、おれは宇宙と地球の親善大使のような役割を手伝っているんだ」

何をいつているのだろう。なぜ、おれが宇宙人に関わらなければならぬんだ。

そりゃ、宇宙人に興味はあるけど、おれは宇宙人の味方につくのは、ちよつと気が引けているのだ。なぜなら、この学級には、宇宙

人と戦う五人組シユヤクナンジャイがいるからである。彼らを敵に
まわしたくはない。

「おれにどうしろと」

「おれたちの仲間になってほしいんだ。宇宙人に早いうちにとりい
つて、地球を支配しようじゃないか」

ぶっ。地球を支配と来たね、これはまた。話がどんどん大きくな
っていくよ。

「どうすれば、支配できるんだ？」

「それは、良ければ紹介するよ。知ってるだろうけど、同じクラス
の加賀佳代ちゃんだよ」

加賀佳代がおれに握手を求めた。おれは握手には応じる。

「よろしく」

「よろしくね」

で、どうなるんだろう。

「実は、加賀佳代ちゃんは宇宙人なんだ」

ぶっ。本当なのか、嘘なのか、わかりづらいが、この学年が始ま
って以来、こういうことに慣れているので、本当なのではないかと
考えてしまう。そんな自分が憎い。

それから、どうなるんだろう。おれは黙って聞いていた。

「脇田くんは、加賀佳代ちゃんと子作りをして、地球人と宇宙人の
混血児を生まないか？」

ぶっ。

これにはたまげた。おれの許容量の限界を超えていた。想定外だ。

こ、子作りですとお。

う、宇宙人と子作り……

もう、何がどうなるのか、わからない。

佳代ちゃんの方を見ると、ニコッと笑っていた。縁談である。高
校生である自分にはまだ早い。

おれが答えに困っていると、そろそろと近くにいた三人が集まっ
てきて、山田と佳代ちゃんと合わせて、三人に囲まれた。

「実は、おれたち五人は宇宙人なんだ」
そう彼らはいった。

はいはい。だいたい、わかりましたよ。
宇宙人と戦う五人組シユヤクナンジヤイがこの学級にいるから、
彼らと戦っている宇宙人もまた、この学級にいるというわけですね。
なんとというか、異世界の戦争と同じような構図ですね。

おれが宇宙人の仲間になれば、シユヤクナンジヤイに退治される
というわけですねえ。

これは慎重に考えなければなりませんねえ。色恋沙汰を出せば、
すぐにとびつくおれでもないです。

これは、あれですねえ。佳代ちゃんとの縁談は、お断りしておき
ましようかねえ。

おれはやっぱり宇宙人より地球人のがいいし、政略結婚させられ
るのも、しゃくにさわりませぬえ。というか、こいつら、高校生で
政略結婚を企んでるんですねえ。

恐ろしいですねえ。おっかないですねえ。

日本の未来が心配です。地球人は大丈夫でしょうか。

「ごめん、悪いけど、佳代ちゃん、お友だちの関係でいよう」

おれがそういうと、佳代ちゃんのはつきり不機嫌になりましたね
え。女心は宇宙人でもわからないものですねえ。

そもそも、この様子では、佳代ちゃんはおれのことを好きではな
いようですねえ。そんな人と子作りとか、難しいですねえ。まだ若
いですからねえ、おれ。

「わかった。断るといふのなら、今後、命の保証はできない」

はいはい、けっこうですよ。どうせ、脇役は簡単に殺されるん
です。

宇宙人と戦うのは、おれには無理ですねえ。無力な一般人です
から。

おれは脇役ですからねえ。

きつと、主役のシユヤクナンジヤイさんたちがなんとかするので

しょうねえ。

ということ、宇宙人五人組とは決別した。

この学級の三十一人のうち、十人は異世界で戦争しており、残り十人は宇宙戦争をしているらしい。

六月の後半になると、おれは学校のそばの雑貨屋で買い食いをするくせがついた。それで、雑貨屋のおばさんと軽い会話をするようになった。

「このパンがうまい」

「このお菓子がうまい」

とそんなことを会話していたのだけど、おばあちゃんが不思議なことをいった。

「魔法のお菓子はいらんかね」

おれは直感的にやつかいことに巻き込まれる気がして、すぐさま断った。

「いえ、いいです」

「そうかい。魔法のお菓子は、魔法の国への招待状なんだがねえ」
お断りします。自分は脇役ですから。

そこへ、同じクラスの女子が五人やってきた。うちの学級では、ロングスカートが流行っているの、女子の制服もロングだ。ちなみに、髪型もロングが多い。

「おばちゃん、魔法のお菓子ちょうだい」

「わたしも」

「わたしも」

と、五人全員、魔法のお菓子を注文していた。

もう、おれには先の展開がわかる。この五人は魔法の国へ招待される。

おめでとう。おめでとう。魔法の国へ行くとうなるんだろう。

「魔法の国から帰ってきたら、お土産をちょうだいよ」

おれは行ってみた。

「うん、いいよ」

「ずっずっしいやつだなあ」

「お返しは三倍返しだぞ」

「そうだ、三倍返しだ」

「返さなかったら、覚悟しろよ」

五人娘が騒がしい。

それから、おれは家に帰って寝たのである。熟睡であった。

魔法の国へ行った五人娘はどうなったかということ、次の日に学校で会っても教えてくれなかった。冷たい。

「ねえ、お土産は？」

おれは聞いてみたが、

「は？ そんなもん、ねえよ」

と一蹴された。まあ、仕方ない。お土産を催促するのはよくない。

「それじゃあ、バイバイ」

とおれは五人娘と別れて、家路を急いだのだが、学校のすぐそばで、同じクラスの男子に襲われた。

その男子は、指向性電磁波装置をもっていた。

まずい。危険だ。殺されるかもしれない。

うちの同級生は殺人鬼だったのか。

後悔先に立たず。

まったく、ろくな同級生がいないが、おれは殺される危険に陥ったのである。

「ふははははは、死ぬ、愚かな一般市民よ」

同級生なのに、一般市民扱いされた。まあ、脇役ですから。

おれはここで死ぬ運命なのか。

さああああああああああああああああああ、たいへんだあ。

「ミルミルミルクのナンダラバンジャラ　お菓子の国から来た正義の使者、魔女っ子リリナ！　悪い人は許さなすよ」

「タスタスタスクの（以下略）」

「……（略）」

「……(略)」

「(略)」

五人の魔女っ子が現れた。

つまりは、五人娘は、魔法の国へ行って魔女っ子になって帰ってきたわけである。

それに立ち向かううちの男子同級生はというと。

「はははははは、面白い。相手になってやろう」

ちゅどーん。男子同級生の指向性電磁波装置は破壊された。

「なにい、このわたしが負けたのかあ」

瞬殺された男子同級生。

しかし、その後ろから、残りの男子同級生が現れた。

「おや、湯川が倒されたようだな。」

「しょせん、湯川は天才五人衆でも、最弱の男。肩腹痛いわ」

五人の男子同級生を迎え撃つ五人の魔女っ子。

「いったい、あなたたちは何者」

魔女っ子がたずねる。

うん、おれも聞いてみたい質問だ。男子同級生五人組は隠すことなく正体を明かした。

「我らこそ、世界征服を企む天才科学者、天才五人衆だあ」

「すごい展開だ。茫然とするおれ。」

でも、おれは見るだけです。戦ってるのは、残りの十人で。

この時から、五人の魔女っ子対五人の天才科学者の戦いの火ぶたは切って落とされたのである。

おれは見るだけ。脇役ですから。

6 (後書き)

天才科学者はもっと詳しく書いた方が萌えそうだなあ。

三十一人のうち、十四人が主役で、十六人が悪役。脇役はおれ一人。

つまり、このクラスのおれ以外は、みんな、主役か悪役なのだ！

！！

脇役はおれだけだ。

主役は輝いているし、悪役も見方によっては魅力がある。この学級のおれ以外の全員はみんな、魅力に満ちているのだ。そして、高校生活を充実にするにすぎしているのだ。

それなら、それでいいじゃないか。おれは、自分が主役でなくてもいいし、もちろん、悪役でなくてもいい。

おれは自分が目立たない脇役でいい。

例え、おれのこの先の運命が、主役たちの戦いに巻き込まれてあっさり簡単に殺されることであろうとも。

おれは脇役として生きよう。

おれには、おれにできることがあるはず。それを精いっぱいやっていこう。

脇役のおれにしかわからないことがあるかもしれない。

脇役のおれにしかできないことがあるかもしれない。

ただ、主役や悪役が派手に登場するのを見て驚くだけの観客でもいいじゃないか。世の中のすべての人に重要な役はまわって来ないもの。

おれは、存在価値の薄っぺらな脇役でいい。

おれは、非力でひ弱な脇役でいい。誰が脇役を嘲笑おうか。物語の登場人物の九割は脇役ではないか。

味のある脇役。渋みのある脇役。助演男優賞などが狙える脇役でいいじゃないか。

おれに主役なんて、無理なもの。

おれに悪役なんて、無理なもの。

おれは、小さな力しか持たなくてもいい。だって、世界中をほぼ埋め尽くしているのは脇役だろう。脇役ががんばらなくてどうする。脇役ががんばっていて当たり前前の世界で、主役や悪役は、存在価値を引き立たせるのだ。

脇役ががんばっていた方が、主役も悪役も暴れがいがあるというものだろう。

例え、おれが人生の脇役でも、おれには祝福された生き方ができるだろう。

野原の見えもしないような小さな花だって、よく見れば、きれいな花が咲いているものさ。

いいや、そもそも、おれは、自分が幸せになれなくてもいいのかもしれない。おれは昔から自分が幸せになることを目指していなかった。

おれという人生は、みんなに注目されることなく閉じるのだ。それが定めだ。それが宿命だ。おれは生まれながらの脇役なんだ。

おれの努力は、みんなにとって、どうでもいい小さなもので。おれの悲しみは、みんなにとってどうでもいい些事で。おれの、夢は世界の対局を動かしたりはしないのだ。

脇役万歳。全人類皆脇役。

たまたま、この学級の同級生が、世間の常識とはかけ外れて魅力的なやつらだったというだけさ。主役や悪役には、ふさわしい劇的場面が訪れることだろう。しかし、脇役のおれに劇的場面などない。おれのこの物語は、地味に、土着的に、俗に、幕を閉じることだろう。人生とはそういうものだし、ならば、おれが脇役であることは、現実的な着目点であるといえよう。

おれの人生こそが、世界人類の大多数の人生であり、おれはその模型である。そこに夢やロマンはないかもしれない。だが、等身大の親近感があることだろう。

おれは脇役として、この物語を生きよう。

大冒険するのは、全部、他の奴らさ。おれは、家でごろごろして
いるだけ。庶民的な登場人物を演じよう。

そもそも、人生に期待するなど愚かなことで、人生とは暇と惰性
に埋め尽くされるものなのだ。それはまさに脇役の人生ではないか。

おれは、安部が魔王を倒す時、学校で勉強しているし、いちろう
が宇宙人を倒す時、テレビのくだらない番組を見ているし、リリナ
が天才科学者を倒す時、ぐうたらと昼寝しているのだ。

それが脇役というものであり、人の生きる人生そのものなのだ。

七月、副担がようやく正式に担任に任命されて、顔を出した。若い美人の女の先生だ。それとは関係なく、おれの学校生活はつづく。

安部が、体育の授業の100メートル走で、5秒02の学校新記録を打ち立てた。安藤は、走り高跳びで六メートルの高さを飛んでいる。つぐみは、運動場に雷を落とす遊びを始め、つぼみは、鍵のかかった理科室の扉を自在に開けるようになった。

脇役であるおれは、へえ、すごいなあと羨ましく見ている。この四人の勇者が、放課後、異世界を救う冒険をしているのであり、異世界の命運はこの四人の肩にかかっている。

なんでも、話を聞いている限りでは、安部が、異世界のお姫さまに求愛され、引き受けるべきか断るべきか悩んでいるらしい。

「滅びかけた国のお姫さまが頼ってきたんだろ。引き受けて、力になってやればいいじゃないか」

とおれはいったのだが、それを聞いてうつむいた安部をよそに、安藤がおれの腕を引っ張った。

何ごとかと腕を引き返していたおれであるが、しばらくして、安藤の力に負けた。安藤が耳うちで喋るところによると、

「バカだなあ。安部には、他に気になる相手がいるってことだよ」ということらしい。お姫さまと天秤をかけるぐらいの女、それが誰であるのか、おれはなんとなく気づいた。安藤たちが、正面きつて反対しかねるのも、安部に気をつかったことなのだろう。

何も知らないつぐみが、

「お姫さまはすごい美人なんだから、すけべな安部ちゃんならふたつ返事で引き受けると思ったのにい」

などといっている。これは、安部は悩むわけだ。毎日、寝るたびに悪夢にうなされているにちがいない。お姫さまの求愛をきっかけ

に、無意識のうちに妬んだつぐみに、嫌がらせを受けているのである。

おれは安藤にそのことを聞いてみた。

「安部の本心は、お姫さまではないんだろう？」

すると、安藤が焦って答えた。

「それはそうだ。だが、しかし、異世界を救う我々が色恋沙汰にふりまわされて、立ち止まっているわけにはいかないだよ」

「安藤は、素直に安部、つぐみを応援しているわけではないみたいだね」

「それはそうだ。だから、我々が色恋沙汰にふりまわされているのだ」

安藤が拳動不審だ。

「安藤は、安部ちゃんをつぐみが一緒になつては都合が悪いもんねえ」

とつぼみがいう。

ははあ、読めてきたぞ。安部は、本命では、つぐみを狙っている。つぐみはそれを知っていて、いじわるをしている。

そして、安藤は、秘かに、自分こそがつぐみを手にはできないかと狙っているのだ。だから、お姫さまと安部がくっつけば、安藤としては、本当は都合がよいのだろう。

で、その安藤を狙っているのが、つぼみという図式だ。

複雑な五角関係なんだなあ。

異世界を救う英雄である四人は、それくらい恋に冒険にがんばればいいと思うよ。おれは話を聞いてあげるだけしかできないからね。青春しているんだなあ、と四人の勇者に対して思ったおれ。

おれも本当は彼女が欲しいなあ、と脇役に似つかわしからぬ願いを夜空に祈った十七歳の夏。

8 (後書き)

毎日の更新は無理っばいです。もうすぐ、不定期更新になります。

おれが学校から帰ろうとしている時、厚いフードを被った少年に話しかけられた。

「ここはどこですか」

おれは素直に答えた。

「ここは柊高校です。ようこそ、いらっしやいました」

なんか、自分がRPGの村人になった気分で、おれは少し落ち込みながらも、少年に四人の勇者がまだ残っている教室への行き方を教えた。

村人A、それがおれなのだ。脇役には、ふさわしい役柄ではないか。村人Aの何が悪い。村人Aだって、立派に生きているのだ。村人Aを非難するのは、数多くあるRPGの村人Aをないがしろにする最低な行為である。村人Aも、世界を救うのに、ほんのちよつとは役に立っているのだ。村人Aを侮るなかれ。

そして、おれは六人の魔族と会ったのである。

六人の魔族は悩んでいた。

「どうしたの」

おれが話に入ると、六人の魔族はため息をしながら答えた。

「それが、四人の勇者がみるみる力をつけているのだ。このままでは、あちらの世界の支配権は人類に奪われてしまう。我々は、再び地下に隠れてすごすことになるのだから、場合によってはそれも難しい。我々魔族は、全滅するかもしれない」

「それはたいへんじゃないか。おまえたち、高校を卒業する前に、死んじゃうんじゃないだろうな？」

おれが悲しそうな声を出すと、魔族は自嘲気味に笑った。

「死ぬことはないかもしれないが、魔族としての力は封印されるだろうな。あの勇者たちの考えそうなことだ」

「なんとか、人と魔族が共存する世界をつくれなのかな」

おれが提案すると、魔族が一笑に付した。

「人と魔族が共存する？ それはまずありえないな。不可能だ」
「なんで？」

「前にもいったが、人と魔族とでは、存在理由がちがすぎるのだ」
「どういうこと？」

おれが聞くと、魔王は黙った。この前の主張をくり返す気はないらしい。代わりに、真宮寺が答えた。

「おれたち魔族が見た世界は、おまえたち人類のしている世界とは根本的にちがうのだ」

「またその話？ この前、抵抗文化の話はしたと思うけど」

「そうじゃない。おれが思うに、世界は滅びたがっているのだ」
「！」

おれは驚いた。魔族の世界観は、悲観的すぎる。

「人類は滅びたがっているのだ」

「そんなことはない」

「いや、そうなのだ。世界は滅びたがっている。人類は滅びたがっている。だから、我々、魔族がいるのだ」

「そうだろうか……」

「おれたち魔族は死にたがっている」

「なんで……」

「おまえも死にたがっているのだ。脇田」

はつと、本音をいい当てられた気がして、胸が苦しくなった。

「でも、世界は滅びない」

「いや、あの四人の勇者も死にたがっているのだ」
「なっ」

いい返すことばもなかった。

「滅びた方が面白い」

「でも、そんなのほんの短い遊びにすぎないじゃないか」

「滅びた方が宇宙の理に適っている」

「それは魔族の見解にすぎず」

おれは反論するが、それが人類の見解にすぎないことはわかっている。

「滅びることこそがみんなの目的なのだ」

おれはいい返せなかった。

四人の勇者は、いつか、異世界を救い、魔族をみんなやつつけるだろう。六人の同級生は、倒されて、欠席するだろう。

なんとか、そうならないように、異世界で、人と魔族が共存できる世界を築くように計画を練らなければならない。

四人の勇者は勝つだろう。六人の魔族は負けるだろう。だけど、それで学校の仲間がいなくなってしまうのは、あまりにも悲しい。なんとか、異世界で、人と魔族が共存する世界がつかれないだろうか。

世界を滅ぼしたがっている魔族と共存する方法……

おれは、あまりにも難しい難題に頭をかかえて、家で一人もんどりうっていた。

おれは、安部と異世界の政治経済について語り合った。

政治経済などというあまりなじみのない話題に、安部は戸惑っているようだった。

「つまり、村人の敵を倒す。それがぼくたちの仕事なわけだよ」

安部はいう。それはわかっている。わかっているが、それだけで思考停止してしまうのは、なんか、釈然としない。

「きみたちは強い。信念もあり、体だけでなく心も強い。きっと、異世界の人たちを救う救世主となるだろう。だが、その後、どうなる。おれはそれを聞いているのだ」

安部は真剣に考え込んだ。

「ぼくはあまり頭がよくない。難しい話は、安藤のが得意だろう。だけど、戦うと決めたら、敵は倒す。それがぼくらの使命なのだから」

「ただ、倒すだけでなく、何か、お互いに手を結ぶ策はないだろうか」

「ぼくらを迷わせないでくれ」

安部はきつい声を出した。

「戦場では、一瞬の迷いが死を招く。敵に情けをかけていては、その隙を突かれて、おれたちはやられてしまう」

「人類が正義とは限らないではないか」

おれがそれを口にすると、安部は鋭い視線でにらみながら、はっきりと答えた。

「正義とは、決断力だよ」

むう。おれに決断力はないが。

人類が勝つと決断して戦うことが、正義だというわけか。それが安部の考えか。

「魔族は、滅びたがっているらしい」

「魔族と共に、世界を道連れにして滅びろというのか。そんなのは無理だ。死こそ美だ、滅びこそ真実だ、とわめく破滅主義者に世界の命運を任せることはできない。あの世界を救う。そして、繁栄させる。人々も、獣たちも幸せになるだろう。魔族は、敵だ！ 付き合っているのは、足を引っ張られるばかりだ。魔族は、狂っているんだ」

おれは悩む。

「きみたち四人の勇者が異世界を救ったら、この学級の六人の魔族は高校を中退してしまう。それを避ける手はないだろうか」

「滅びたがっているやつらをどうすれば、満足させたまま存続できるんだ？ そんなの不可能だよ。魔族は、あいつらの望むように滅びればいいんだ」

策はなしか。六人の魔族は、倒される運命なんだろうか。

何か、考えなければ。

世界は滅びたがっている。

おれも死にたがっている。

四人の勇者も死にたがっている。

魔族も死にたがっている。

これを満たして、世界とおれと四人の勇者と魔族を生かすにはどうしたらいい。

悩むおれの心を読んだのか、つぐみが発言した。

「魔族を滅ぼしつづけることはできるよ。何百年の時間をかけて、ゆっくりと殺すことはできる。魔族がゆっくりと死にながら生きることが、わたしたちとの共存だというのなら、そうすることはできる」

それで魔族は満足するだろうか。おれは悩みながらも、

「できれば、魔族を滅ぼすのではなく、ゆっくり何百年かけて殺す方法で倒してくれないか」

と頼んだ。

四人の勇者は、悩んでいた。

おれは、何をしているんだろう。脇役のくせに。世界を救えなかった時に責任をとることもできない脇役のくせに、図々しくも意見を押し付けている。おれは最低なやつなんじゃないだろうか。と悩んで、また家で悶々としていた。

おれは同級生の活動の全体的な構想を書き込むノートを一冊用意した。

「異世界の人たちの人口つて、何人くらいなの？」

「そうだなあ。考えたこともなかったけど、数百万人だろうなあ」

「魔族は何人くらい？」

「数千じゃないかな」

ふうん、おれはノートに数を書きこみ、考えこむ。

「きみたち、四人の勇者が魔族にとどめをささなかつた場合、魔族は、この世界と異世界を行き来しつづけることになる。つまり、この世界は、異世界と交流するようになる必要がある。その時、どうなるかを予測してみたが……」

四人の勇者はいった。

「勘弁してくれ。ただ戦うだけでも精いっぱいなんだ。魔族を助ける余裕はないよ」

おれは要求を押し付けるように話しつづける。

「異世界とこの世界が交流した時、経済的には、こちらの世界のが規模が千倍は大きいことになる。どうやら、あちらの世界の文明水準は中世のようだし、貿易をした場合、こちらの世界が一方的に経済的に優位に立つと思う。もし、こちらの世界とあちらの世界を結ぶ出入口ができた場合、こちらの世界の住人があちらの世界を植民地にしてしまうだろう。つまり、魔族を滅ぼさずに生かしつづけた場合、こちらの世界の人類が、異世界にとって新たな脅威となる」

おれの計算を聞いて、安部は、

「うへえ」

とうなった。

「こちらの世界とあちらの世界を行き来することは、きみたち四人の勇者と魔族にしかできないのだから、きみたちは、異世界との貿

易の仲介業を始めれば、莫大な利益をあげることが予想できる。おそらく、卒業後の収入には困らないくらいだ。そして、これは異世界を近代化する手助けにもなる」

「それは面白いけど」

安部は苦渋の表情でうなずいた。

「ただし、それを見れば、魔族もこの世界と異世界の貿易を始めだろう。魔族の背徳的な交渉で貿易をさせるわけにはいかない。だから、魔族を生かして異世界と交流する場合、きみたち四人の勇者が、魔族による異世界との貿易を取り締まる必要がある」

「面倒くさそう」

安部は、顔をそむけた。

「異世界の魔術的道具は、この世界でも貴重な存在だろう。魔術的道具を商品とすれば、異世界がこの世界と対等に貿易することは可能だと思う」

「ふーん」

「なんとか、この計画で、異世界と魔族とこの世界との交流を進めることはできないだろうか」

四人の勇者はああだ、こうだとそうだんしていたが、結論はすぐ出た。

「ぼくたちが、異世界とこの世界の貿易の仲介業を全部引き受けるということで、問題はないよ。ぼくらは高校を卒業したら、就職したり進学したりするけど、副業で、異世界との取引を引き受けてもいい」

とのことだった。

おれはひとまず、肩の荷がおりた。四人の勇者が戦いに勝ちつづければ、いずれ、そうなる時が来るだろう。

異世界戦争の行く末にひとまずの見極めをつけたおれは、次は宇宙戦争にとりかかった。

放課の時間に、シユヤクナンジャイと話し合う。

「きみたち五人は、宇宙人から地球を守るために戦っているのだから?」

「そうだけど」

いちろうが答えた。

「毎回、宇宙人を派手にやっつけているのかい?」

「まあね。演出は火力だよ、脇田くん」

いちろうはいう。

「で、勝算はあるのかい? 宇宙文明なんてものは、地球より遥かに高度な文明をもっていそうだけど」

「今まで十二回戦って、十二勝しているよ。正義は勝つのだよ」

十二戦全勝か。思ったよりずっと強いんだな。

それとも、宇宙人が予想より弱いんだろうか。

「いやあ、地球の平和を守ってくれてありがとう」

「いや、当然のことだよ」

というわけで、シユヤクナンジャイとはひとまず別れた。

つづいて、宇宙人五人組に会う。

「きみたち、宇宙人は地球を征服するつもりなんだろう?」

「そうだけど」

山田が答える。

「高度な文明を誇る宇宙人が、そんな野蛮なことをしているのかな?」

とおれが聞くと、山田は答えた。

「上層部の考えでは、宇宙的進化の中で、地球人は自然淘汰される

ということらしいね」

自然淘汰が敵と来たか。

まったく、悪役の考えることはいろいろともっともらしい理由が
たくさんあるんだなあ。しかし、それを否定しなければ、この世界
を守る理由というものはつくられないのだ。理由がなければ、誰も
戦わないだろう。

おれは、自然淘汰に反論する。

「自然淘汰って、弱い生き物が必ずしも絶滅するとは限らないんだ
ろう?」

「そういや、そうだな」

山田は今、気づいたかのように答えた。

「細菌だって、ミジンコだって、ウサギだって、生きているしね。

地球人は、生き残るウサギなんじゃないかな?」

「それは、生きのびてもらわないとわからないよ」

「きみたち宇宙人は、シユヤクナンジャイと十二回戦って、十二回
負けているんだろう?」

「そうだけど。シユヤクナンジャイはいつか倒すよ」

「無理だと思つよ。彼らは主役だからね」

山田のこめかみが歪む。

「地球人が主役だという考えは、実に地球中心主義な考えだ。宇宙
的考えとはいえない」

確かにそうだ。

「きみたち、宇宙人は、地球征服をどうしたら、あきらめるんだい
?」

「地球がある限り、あきらめることはないだろう」

むう。これは、かなり厳しい展開のようだ。

なんせ、敵は宇宙だ。用心を重ねるにこしたことはない。

シユヤクナンジャイが倒されたら、地球は征服されてしまう。異
世界を救おうとしている四人の勇者も一緒に征服されるだろう。な

んせ、敵は宇宙だ。かなり、手ごわい。

シユヤクナンジャイが倒されて、五人が高校を中退する結末を迎えるのだろうか。それとも、宇宙人五人組が中退する結末を迎えるのだろうか。

どっちが勝っても、学級の衰退はまぬがれない。

おれは、またしても、家に帰って悩みこみ、うんうんとうなっていた。

おれはシュヤクナンジャイに話しかけた。

「宇宙人をただ倒すのではなく、宇宙人と手を結び、共に繁栄する道を探ることはできないだろうか？」

おれの提案は、かなり厳しい批判にさらされた。

「宇宙人は悪だ。悪を倒して何が悪い」

「宇宙人には血も涙もない」

「宇宙人には気を許す妥協の余地はない」

シュヤクナンジャイの五人は散々におれに反論した。

そんなシュヤクナンジャイのためにおれが用意した策は、情報収集である。

「おれたちは宇宙人についてあまりにも知らなさすぎる。宇宙文明についてもっと調べるべきだ」

「しかし、いったいどうやって。相手は宇宙だぞ。行き方がわからない」

そこで、おれは一冊の本をとり出した。

アーサー・C・クラークの著した『幼年期の終わり』である。

「これを読んだことがあるかい？」

「ああ、幼年期の終わりなら、昔、読んだよ」

「この作戦を実行したらどうかと思うんだ」

「意味がわからない。幼年期の終わりの何を実行したらいいんだ？」

シュヤクナンジャイは首をかしげた。

「『幼年期の終わり』の第二部の作戦だよ。きみたちは、宇宙人の宇宙船に密航して、宇宙人の故郷へ探検に行ってみないかい？」

「な、なんだってえ」

五人はその作戦に驚いたようだった。幼年期の終わりの第二部は確かにそういう話だ。だが、実際に実行するには、あまりにも危険が多いのではないか。

「そして、宇宙文明の中で、地球人に好意的な集団を探してほしいんだ。その宇宙人たちをきっかけに、宇宙人と交渉し、地球人の独立を保ったうえで宇宙人と地球人の同盟を結ぶという筋書きだ」
シユヤクナンジャイは、顔に汗を流していた。

地球を離れ、宇宙人の故郷へ旅して、生きて帰ってこれる確率は低い。だが、誰かがやらなければならぬだろう。やるなら、当然、主役であるシユヤクナンジャイの五人が行くしかない。

「やるか」

「いちろつがいった。

「やむをえないじゃない。宇宙人と永久に戦いつづけるのは無理なもの。休戦するためにはそれしか作戦はないよ」

里中が賛成する。

そして、シユヤクナンジャイは、宇宙人の宇宙船に密航して、宇宙文明へと旅立ったのだった。

シユヤクナンジャイの五人は一週間、欠席した。

一週間後、シュヤクナンジャイが帰ってきた。

「いやあ、楽しかった。宇宙旅行って最高だね」

シュヤクナンジャイは、五人とも無事に帰ってきた。

「どうだった、いちろう？」

おれが聞くと、いちろうはべらべらと一週間の旅を話しつつけた。「びつくりしたよ。宇宙船に乗りこんだのはいいけど、里中がお風呂に入りたいつてこねるから、宇宙人の宇宙船の中でお湯を探したんだよ。そしたら、お湯でできた宇宙人がやってきて、そんなにお風呂に入りたいたいなら呑み込んでしまっぞおつていうんだ。里中が、呑み込まれたんだけど、里中がゆったりとお湯につかっているとひろしが見つけて、里中が悲鳴をあげて、洗面器を投げつけたんだ。それで、全裸の里中と一緒に、宇宙人の宇宙船の中を逃げまわったんだ」

「それは楽しそうだね」

さすが、主役のシュヤクナンジャイである。家でごろごろしていたおれとはおおちがいだ。

「それで、宇宙人の翻訳機を手に入れて、放送室を占拠して、何百カ所に連絡をとったんだけど、そしたら、異性生命体と友好を結ぶ団体が見つかって、そこへ行ってきたよ。そしたら、ひろしが宇宙人と恋に落ちて、ひろしは、今、宇宙人と文通しているんだ」

「へえ」

やっぱり、楽しそうだ。これが主役というものか。

「帰ってくる途中で宇宙帝王をやっつけてきたけど、宇宙旅行はだいたいそんな感じだったね」

宇宙帝王を倒した話をあっさり終わらせちゃう辺りが主役って感じだね。

そして、おれは一冊のノートをとりだした。

「友好的な宇宙人と連絡を密にとり、なんとか、宇宙人と平和条約を結びたい。しかし、宇宙文明と地球文明が貿易を開始した場合、宇宙文明が地球の商品より圧倒的に高い競争力をもつと思われる。宇宙文明と貿易をした場合、地球人は、貿易の取引で大損をすると思われる。とにかく、宇宙文明と地球文明の技術差がありすぎる。かつて、ヨーロッパ人の持つてくるガラス球を宝石と交換したアフリカ人のように、大損な取引を引き受けさせられる可能性が高い」「じゃあ、宇宙人と貿易したら、ダメじゃん」

「そうだ。だが、宇宙文明の技術を手に入れることは、地球文明の発展に好影響をもたらすことはまちがいない。そこで、宇宙文明の調査をできるだけ速やかに行い、取引で詐欺に合わないようになければならない」

「難しいのね」

「その管理は、シユヤクナンジヤイに任せようと思う」

「えええ、おれたち、そんな難しいことできないよ。まあ、それは、おれたちを支援してくれている国連に任せよう」

シユヤクナンジヤイの支援者は国連だったのか。

「うん。ならば、その通りに実行してくれ。幸運を祈る」

宇宙文明との交易は、異世界との交易と違い、この世界が劣位に置かれる。貿易は、取引する両者に利益をもたらすというのが経済学の基本概念だけど、それを信じて任せるしかない。経済学の盲信は、人類の危機を招く。その危機管理は、国連がやってくれるだろう。脇役のおれには、頭がパンクして、考えれそうにない。

おれは、次は五人の魔女っ娘に話しかけた。

「きみたちは、毎夜、毎夜、天才科学者と戦っているんだろう？」

「うわっ、それ、すごい秘密なのよ。絶対に内緒にしておいてね」
リリナがいう。

「それで、きみたちはなぜ争っているんだ？」

「それは、魔法少女の秘密よ」

「実は、特に理由はないんだろう？」

「それは、魔法少女であるがゆえに」

えへん。おれはひとつ大きく咳をした。

「毎日、特に理由もなく戦いつづけ、傷ついているんだろう？」

「わたしたちは、世界を守っているのよ。世界のために。あ、ごめん、これ以上は秘密」

わかっているのだ。この五人娘に戦う理由がたいしてないことは。なんだか、この五人は、青春しているなあ。

「で、どの天才科学者がいちばん好みなんだい？」

おれが質問を持ちかけると、五人の魔女っ娘は、教科書を丸めてきりぎりした。

「わたしは、小林がいちばん許せないわね。徹底的に痛めつけて、土下座して謝らせるわ」

ふむ。

それから、同級生の湯川、朝永、江崎、小林、益川に対して、語るのも無残な罵倒がとびかったのである。

「天才科学者たちはどんなやつらなのかな？」

とおれが聞くと、

「ドエロ」

「セクハラ」

「変態」

「萌え豚」

「露出狂」

との回答があつたのである。五人の男子同級生は、かなり、破廉恥にがんばっているようだ。

「天才科学者が地球の平和を乱す可能性はどのくらいある？」

「それはゼロに等しいわね。わたしたちがいる限り、悪が栄えることはないのよ」

かなり、見通しは明るそうである。

おれは、その日は熟睡できた。

そして、次の日は、五人の天才科学者を訪れた。

「きみたちは、毎夜、五人の魔女っ娘と戦っているんだろう？」

「わははははは、いかにも、その通りじゃあ」

天才科学者は異常に陽気だった。手に持った道具で、あちこち暴れている。これが天才というものだろうか。

「いったい、きみたちはなぜ魔女っ娘と戦っているんだ？」

おれが聞くと、五人が大笑いした。

「わははははは、天才に生まれたからには、魔女っ娘と戦わないわけにはいかないだろう」

「はたしてそうだろうか」

「天才は魔女っ娘と戦う宿命なのじゃよ」

わははははは、と天才科学者たちは笑う。

特に、おれが考察することはない。

「天才に生まれたからには、天才として、天才にふさわしい高校生活をするべきだろう」

それがはたして、魔女っ娘と戦うことであろうか。

「おっぱい、おっぱい、おっぱいいいい」

ああ、やはり、破廉恥にがんばっているようである。

「とにかく、未来の計画はたっぷり詰まっているのだ。あんなことや、こんなことも、そんなことや、やっぱり、あんなことも、極め

つけにあんなことをしてやるために」

これ以上、聞かない方がいいだろう。

これが天才科学者の現状と未来の展望である。

天才科学者が、地球の未来を脅かすことは、五人の魔女っ娘ががんばっているかぎり大丈夫だろう。わかっているのだ、この五人の天才科学者に特に戦う理由がないことは。

おれはその日も熟睡した。

七月も後半になり、夏休みが近づいてきた。

四人の勇者は、異世界で連戦連勝で、魔族を倒しまくっているらしい。安部がいうには、

「とにかく、ご飯が美味しい。これが効く。丸焼きにした巨牛の肉を食べた時の味は、生涯、忘れないだろう。切り口から肉汁が滴り落ちて、旨味が口の中にじわっと広がるんだ。軽く焦げついた皮が香ばしい匂いを出して、まさに絶品といえた。あれを食さないで人生を終えるのは惜しい」

とのことだ。食べ物の話から始まるほど、異世界の牛の肉が美味しかったにちがいないが、おれはその巨牛を食べることはできない。話を聞くだけでも、よだれが出てきて、美味そうだ。

「魔族との戦いは、もうかなり慣れてきたよ。楽勝で勝てそうな気がする。ぼくたちは、鍛錬をしすぎたようだ。強くなりすぎてしまったんだ」

余裕の表情の四人の勇者だ。

そこまで勝ちつづけているのなら、逆に六人の魔族は、苦しんでいるだろうと、おれは思った。

脇役のおれにはめつたに見ることのできない直接対決の場面があった。

放課の時間に、四人の勇者と六人の魔族がにらみあっていた。

魔族の魔宮はいった。

「金も女もくれてやる。それで世界を救ってみせる」

おれははらはらとした気分でありいきを見守っていたのだけど、四人の勇者は、堅く武器を握りしめて立っていただけだった。金も女ももらい受け、それで世界を救ってみせるつもりなのだろう。

六人の魔族は、以後、学校を欠席するようになった。

脇役のおれには、まったく状況がわからないのだけれど、どうや

ら、四人の勇者の最終決戦が近いらしい。四人の勇者は、もうすぐ魔王と戦おうとしているのだ。

おれは、ただ噂話を聞くだけしかできなかった。

安部とつぐみは、魔王を倒したら、付き合おうらしい。死亡フラグでなければよいが、とおれは思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5657x/>

脇役は簡単に殺される

2011年10月28日06時12分発行